2013年3月1日発行

ニュースレター No.32-33

News Letter

CHRISTIANITY AND CULTURE RESEARCH INSTITUTE KANTO GAKUIN UNIVERSITY

関東学院のこれからの「奉仕教育」

所長　帆苅　猛

関東学院は、坂田祐が中学関東学院を設立して最初の卒業生を送り出した1924年に校訓「人になれ　奉仕せよ」を定めて以来、これを堅持してきました。しかしこれは、坂田が定めたというよりも、むしろ、関東学院の最初の源流であるバプテスト神学校の創設の時以来大事にしてきた建学の精神を言語化したものです。すなわち、バプテスト神学校の創設者であるアルバート・アーノルド・ベンネットは「奉仕の人」と言われ、その墓碑銘には“He lived to serve.”(「彼は奉仕の生涯を送った」)と刻まれ、いろいろなエピソードが伝えられています。この精神が受け継がれ、坂田を通して校訓として定着したとみることができます。

それではこの校訓は、教育の中では実際にどのように生かされてきたのでしょうか。それは単なる知識としてではなく、具体的な実践の中で培われてきたということができるでしょう。関東学院の社会事業部のセツルメント活動がそうであり、また、坂田が重視した三崎宿舎での生活を通しての学びもそうした実践教育ということができるでしょう。

現在、学校教育が転機を迎えているといわれています。学生、生徒たちの学習意欲が、日本の場合、とくに極端に低下しているといわれています。一方では、今以上に知識の詰め込み教育を強化しようとする傾向もみられます。しかし、日本の教育の現状は、一方的な知識の詰め込み教育が限界を迎えているということを示していると思われます。大切なのはもう一度教育の意味を問い直すことでしょう。

坂田とともに中学関東学院の創設に力を尽くしたチャールズ・テンネーは「自己の中だけで完結する教育は空疎なものです。真の教育とは自分のためではなく、他者を祝福するためのものです。」と記しています。関東学院が大事にしてきた他者とのかかわり・奉仕の実践を通して学ぶ教育が今、求められているのではないかと思います。そのためにキリスト教と文化研究所も協力できるのではないかと考えています。

「關東學院セツルメント」パンフレット表紙(左:坂田記念館所蔵/右:大学図書館所蔵)

ハワイにおけるサービス・ラーニング

interview with
Lisa Gayle Bond
リサ・ゲイル・ボンド

ハワイ州の教育はアメリカの他の州とは少し異なっており、統一公立学校制度を持っている州です。つまり、これは州全体を通して同一のカリキュラムを持っているということを意味しています。それだけでなく、予算の配分や施設は基本的に州全体を通して平等で、州のどの部分であっても格差が生じるのを防ぐことが可能な制度となっています。また、ハワイ州の教育環境でもう一つの興味深い現象は私立学校が優勢であるということです。1820年に宣教師がやって来て教育を行うようになってから、彼らが始めた学校の多くはハワイ全体の島々で見られる私立学校の大きなネットワークの一部となっています。ホノルルの都市部だけでも1年生から12年生までが在籍する学校は124校あり、そのうちの48校は私立で、全体のおよそ29%の生徒が私立学校に通っている計算になります。アメリカの都市部でこれほどまで様々な私学教育を提供しているところはありませんし、これほどまで私学への就学率が高いところはありません。

私立学校が親たちや生徒に関心を持ってもらうためには学校の使命や哲学に裏打ちされたプログラムのみならず、それぞれの学校が健全なカリキュラムを持っている必要があります。2012年の9月初旬、私たちはホノルルにある有名な私立学校数校を訪問し、教員と職員にそれぞれの学校の使命と哲学について、またそれが学校教育の中でサービス・ラーニングを組み入れることとどのようにむすびついているかということについてお話をうかがう機会を持つことができました。

サービス・ラーニングのプログラムが綿密に練られていたのはSacred Heart Academy（聖心女子）です。この学校は幼稚園から12年生までのカトリック系女子学校です。幼稚園を含むすべての学年で園児、児童、生徒たちはカリキュラムの中に取り込まれているサービス・ラーニングに参加しています。この学校の教職員は子供たちが卒業後もその経験を自分の家族やコミュニティで生かすことができることを期待しています。7年生（日本の中学1年生）からはサービス・ラーニングは生徒に取って新しい責任を担うものとなります。というのは、その学年（7年生）では15時間から25時間にわたる自分の家での奉仕を担い、次の学年からは決められた時間コミュニティでの奉仕活動に出て行くことになるからです。進級、進学とともに必要とされる奉仕活動の時間も増えていきます。多くの生徒は毎年同じ奉仕活動を行うことを選んでいます。このような奉仕活動はコミュニティへの参加を可能とするのみならず、自分の職業選択、専攻分野を選ぶ際の準備にもなっています。サービス・ラーニングのプログラムは宗教の授業と連携して行われるため、神学を担当する教員がプログラムの責任者となっています。生徒たちは奉仕活動についての日誌を書き続けます。この日誌は生徒たちには振り返りの機会を与え、教員にとっては、生徒たちがサービス・ラーニングに参加する際の指導の助けとなっています。卒業時には日誌は生徒に返却され、学校で学んだことのひとつの記念品として扱われます。

Iolani Schoolは幼稚園から12年生までの聖公会系の学校で、生徒たちの高い学業達成が評価されています。イオラニ学校は3年前にカリキュラムの中に正式にサービス・ラーニングを統合するようになったばかりですが、サービス・ラーニングは学校全体のカリキュラムに取り入れられています。例をあげると高校の理科科の教員たちは第3番目の学期をサービス・ラーニングに当てることになっており、生徒たちにその前の学期までに学んだことから題材を選ばせ、それをコミュニティでのサービス・ラーニングに応用することを求められて

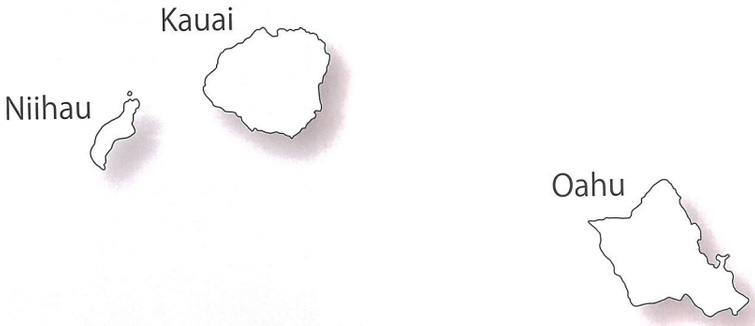
スピーキングから ライティングまでを担当し、ユニークな授業を行うリサ・ゲイル・ボンド教授。イメージを具現化するため、繊細なディテールにまでこだわるきめ細やかなレクチュアにより創られるクラスは、空想的でありながらもリアル感が漂う。キリスト者として奉仕教育のあり方を探る彼女が選んだフィールド、ハワイで独自の視点に迫ってみた。

リサ・ゲイル・ボンド　哲学修士。筑波大学にて倫理学専攻（2013年3月まで）。関東学院大学教授（2008年〜）。英語教育（初心者のための教材の発展）、総合英語（スピーキング）、総合英語（ライティング）を担当し、日本思想史（特に親鸞の思想と浄土真宗）に独自の研究分野を持つ。

います。近隣の水環境は生徒たちが学んだ題材の一つで、その改善に向けて生徒たちは活動を行いました。生徒たちは学内でリーダーとして生徒会を自主的に助けて働き、コミュニティという学外や学内で奉仕、改善を試みています。イオラニ組織、教員、生徒や両親は一ヶ月に一度「サービスサタデー（奉仕活動の土曜日）」に参加するために集まります。この日はコミュニティに出て働き、公園の掃除の手伝いを行ったり、助けを必要とする人々への寄付を募る活動を行ったりと様々な形で変化をもたらす活動をします。イオラニの卒業生は世界中どこにいても自分たちのコミュニティに手を差し伸べる活動を同じ日に行います。このような活動を通して、イオラニ学校のモットーである「One Team（ひとつのチーム）」という考え方は明らかとなっています。それはサービス・ラーニングやコミュニティでの奉仕活動が自己中心的ではない協力の精神と、教員、職員、コーチ、両親、生徒の相互支援というかたちで現れているからです。

この二つの学校のプログラムは必ずしも独特なものではありませんが、このようなプログラムはコミュニティのみならず、その学校への入学を考えている生徒たち、大学の入学選考部の大きな関心を引いています。全米の多くの学校は私立であれ、公立であれカリキュラムの中にサービス・ラーニングとキャラクター・エデュケーション（人格形成教育）あるいはそのどちらかを取り入れる意義に気づき始めています。とはいえ、これらのプログラムがカリキュラムの必要不可欠な要素であると本当に理解することができるのは、ホノルルのように他民族、多文化社会であり、私立学校の競争が激しい場所だと言えるでしょう。

Punahou School



Iolani School

神に仕えるものとしての技術

interview with
Keiichi Furuya
古谷　圭一

理系の道をつけるのびしろとして技術者として信仰結び大学教授として研究と教育に携わりながらキリスト者として信仰のあゆんできた古谷圭一教授。現在、研究者であることと信仰とをテーマとして、技術の神学の創造に意欲を示す。キリスト者としての技術とその課題をどのように捉えているのか、話を聞いた。

奉仕としての技術

まず、技術は科学の単なる応用ではありません。技術は人間が創意をこらして新しいものをつくりだす行為です。そして、創ったものが何かの役に立たないと技術とは言えません。役に立つことを前提としますので、技術は奉仕に繋がります。その点で、技術は科学の応用だけでなく、独自の人間の業なのです。

聖書では、神様は「耕せ」と仰っています。そして、技術者ベツァルエルに「神の箱をつくれ」とお命じになっています。（出エジプト 31:1）「神のために奉仕せよ」ということが聖書の技術的な行為への立場であると思います。一方、バベルの塔は技術に対する否定的な逸話ですが、人が自分の力を誇らかすものとして塔を建てているところに違いがあります。

中世の頃には、技術は神様が与えて下さった賜物であると捉えられていました。知恵を与えられながら自然に支配されている人間が、知をもって自然の支配から脱することが大切であると、ベーコンは彼のキリスト教的な言葉の中で言っています。

技術の「怖さ」

古代・中世において、一般の人たちにとっては、技術はマーギ（魔術）であり、天体観測や薬草の技術を扱う技術者は、薄気悪い人、占星術師、錬金術師、魔女などと捉えられていました。現代になると、技術にあまりに慣れ過ぎてしまって怖さを忘れているようです。現在、科学や技術の中身、例えば、中山教授のiPS細胞の研究もインターネットも、実際のメカニズムを知っている人は限られています。しかしそのまま信じてしまう。知らないまま受け入れられてしまう危険性は過去の時代より遥かに大きいと思います。

名古屋大学の農学部の先生で牧師になられた武岡洋治という方が、スーダンに農業調査で行かれて、機械化農業のために大規模な開発をしたことが自然のバランスを崩し、砂漠化を進めてしまったことをお伝えになっています。その国の人たちを幸せにしようとしたことが、間接的に現在の民族同士の殺し合いにまで繋がってしまっているということです。

善意で、神に繋がるつもりで行ったことも、とんでもないことになっている。その反省が今の時代に繋がってはいます。技術を使いながら、技術を生み出しながら、絶えずその怖さを意識する必要であると思います。

現代におけるリスクの判断と信仰の役割

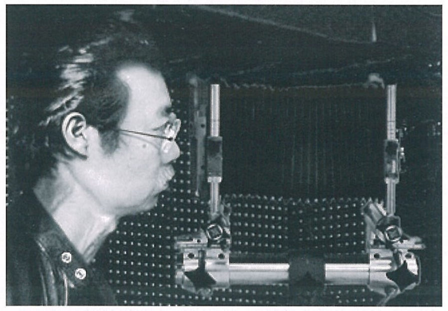
現代の技術者は誰もリスクゼロ（リスクがない）ということは思っていません。ゼロにすることができない、無限小にするように努力するのが技術者です。そして、予測されたリスクとベネフィットのバランスをとって技術は利用されています。

しかし、リスク評価には勘定できるものしか計算に入れられません。例えばそこで被害を受ける人、または自然、それをどうカウントするかは価値判断の問題だと思います。その価値判断に信仰が関わるのではないかという気がします。

技術や科学が取り上げるのは交換できる人や物です。統計的には死亡者1名であっても、亡くなった方や家族にとっては All or nothing です。この All or nothing の問題を科学技術はそのまま扱えません。忘れられがちな弱者に対するいわばイエスの目、弱者を愛するイエスということはキリスト教と技術にとっての大きな課題ではないかと思われます。

ふるや けいいち　1934年生まれ、工学博士、東京理科大学名誉教授、恵泉女学園大学名誉教授（専門：分析化学、環境論、技術論）。日本キリスト教団早稲田教会所属。関東学院大学キリスト教と文化研究所客員研究員。
著作・共著：『近代日本の戦争と教会　日本基督教団四谷教会史』、『聖書の中の自然と科学技術』、『エコロジーとキリスト教』、『科学技術とキリスト教』など。

公認ボランティアサークル「関東学院大学シグマソサエティ」の10年



interview with

Yoshiharu Kanda

勘田　義治

異文化理解をコンセプトに持つ海外ボランティア活動は今や数多く存在するが、奉仕教育を基軸に組み立てられているものは多くない。「細部にまでこだわりながら、きめ細かく準備し、明るく楽しい活動を展開する」ことが長続きの秘訣だとか。学院の奉仕教育のよき成功例と言える関東学院大学シグマソサエティ。顧問の勘田義治にその中身を聞いた。

関東学院大学シグマソサエティ（以下シグマソサエティ）は、大学公認のボランティアサークルです。シグマソサエティ創設からほぼ１０年を経た２００９年、関東学院は、創立１２５周年を迎え、校訓「人になれ奉仕せよ」のもとに、奉仕の精神を学んで成長した学生の中から、１２５周年記念大学事業社会貢献学生アクティビティを募り、その活動を支援・顕彰しました。その一つとしてシグマソサエティも選ばれました。学内の様々な社会貢献グループの中で、長年地道な活動を続け、常にその結果を学内に発表し続けた成果が認められたのですが、その意味では、やはりシグマソサエティは学内奉仕教育を実践する特徴的でユニークなグループといえるでしょう。

シグマソサエティの前身は〝命を支える会〟という大学宗教教育センター内にあった学生奉仕グループ「C‐プロジェクト」内の一グループでした。学生たちに奉仕の実践を通して知識と技能を授け、その心意作用の発達を助ける課外授業として様々なプログラムが行われ、現学院長の森島牧人教授が長年顧問を務めました。骨髄バンクの手助け、学内付属校のＰＣ環境整備、付属小学校での授業補佐などのボランティア活動を経て、現在はタイ北部山岳国境地帯少数民族集落での建設作業に部員を派遣しています。この活動が始まった２０００年よりタイの奥地に赴いた学生は、２００名を超え、卒業生として関東学院で学んだ奉仕の精神を社会や家庭で実践しています。

なぜこんなにもこの活動が続いたのでしょうか。その理由は、このグループが活動した時期にあると考えられます。シグマソサエティが活動し続けた時期は、バブル崩壊以降、価値観や価値序列が大きく変わり、物事の良し悪しを決める「規格」やそれを計る「物差し」自体が大きく揺らいだ時期であるといえます。それゆえ大人も若者たちも、何に価値観を見出してよいかわからず、一抹の不安を常に携えながら、社会を彷徨っていた時期とも言えるでしょう。この時期、長い不況が続く中、日本の社会構造は大きく変化しましたが、高度成長期やバブル期とは異なる新しい価値観を求め、探す若者世代が、関東学院の中に生まれ育ったことも事実でです。

創設以来シグマソサエティは、「奉仕とは何か」という問題に正面から実践的に取り組み、彼らなりの答と成果を出してきました。タイの山奥の集落に彼らの奉仕によって建てられた建物では、民族の子どもたちに文字や読み書きを教える活動が、村のキリスト教指導者によって盛んに行われています。また日本国内で彼らが行ったプレゼンテーションにより慈善団体から資金が集まり、届けた先の集落では生活環境を向上する支援活動が村人達によって行われました。現地に派遣された学生達は身振り手振りによるボディーランゲージによって言葉の壁を乗り越え、お互いの境遇や文化について話し合い、理解し合うことに多くの時間とエネルギーを費やしました。ガスも水道も電気も無い村での生活は驚きと困惑の日々でしたが、同時に発見と創造の日々でもありました。

シグマソサエティにとっての活動の価値は、自分たちの成果を周囲に理解してもらうということよりも、４年間の学生生活の中で、学生自身が「自分」と「奉仕」の関係を描こうとしたことにある、と言ってよいと思います。各々の専攻するテーマに沿って、ある者は幼児教育、ある者は比較文化、ある者は建築学という視点で民族の人々を見つめました。タイでの活動は、特別な時間や空間での出来事です。だから日本ではあたりまえに手に入るものが

かんだ　よしはる　広告制作のフリーランスカメラマン。主なクライアントは住宅や設備機器メーカー、高級家具メーカーなど文学部の教壇に立つ傍ら、学内公認ボランティアグループの顧問として学生をアジアの奥地に引率する。
本学文学研究科比較文化博士後期課程終了。専門は「東漸するヘブライズム」研究。

ままならなくとも、楽しく魅力的だったのかも知れません。民族とのまさに寝食を共にした交流で得たものとは一体何か、この答えを求めて何度も何度もタイの山奥に上った学生も少なくありません。

今の学生諸君にとって、座学で学ぶ「奉仕」は過去の道徳であるといえますが、にもかかわらず、多くの若者が「ボランティア」に興味を持ち、出来ればやってみたいことの一つに挙げるそうです。特に関東学院ではその声をよく耳にします。しかしこれはもちろん、タイに行けばよいということではありません。「奉仕」や「ボランティア」とは、まさにイエス・キリストが自分の人生を賭して人々に説いた、福音の基礎であります。そしてそれは日常の生活の中で起こる様々な出来事にも深く関係しているといえるでしょう。タイでの経験を持った200名が、もしもこの「奉仕」の精神を、学内や自分が居住する地域、あるいは家庭内で行ったらどの様な「気づき」が得られるであろうか。大変楽しみなことです。

2012年度を終えるにあたって、この10年間のシグマソサエティの歩みをタイ北部少数民族への支援活動に焦点を当て、振り返ってみました。活動に参加した生徒、学生、教職員は、現地の人たちとの交流を通して、彼らが置かれている過酷な自然環境、社会環境を知るとともに、蔑視や差別に遭いながらもひたむきに生きる強さを学び、人々との共生の精神を体感して帰国しています。関東学院は長い歴史をとおして多くの奉仕活動を続けてきていますが、このサービスラーニング（奉仕教育活動）に参加することによって、より多くの学生・生徒・児童そして教職員が共生の精神の輪を広げていけるよう祈り、願います。

ルアン村 2010 年

ホイチョンプー村 2009 年

クルディ村 2003 年

関東学院セツルメントの遺産の継承

～関東学院の奉仕教育のために～

学院史資料室 事務室長 瀬沼達也

セツルメント（settlement）とは、「宗教家や学生などによる社会の下層に属する人々に対する社会事業の一つ」と『ブリタニカ国際大百科事典』に定義されている。

1927（昭和2）年、財団法人関東学院が組織され、東京学院が合併してその組織に入り、高等学部（社会事業科、商科）、神学部となった。翌1928（昭和3）年に学院設立の趣旨である奉仕の実践と、社会事業科（後の社会事業部）の実習のために庚耕地に一戸を借りて関東学院セツルメントを開設、教授1名、学生10余名で活動を開始した。後に商科（後の高等商業部）と神学部の教師と学生もこの活動に加わった。

夜学校授業風景（学院史資料室所蔵）

1931（昭和6）年には神奈川の浦島町に、全国からの募金により会館を建設し、労働問題の講座や職業相談と斡旋、児童に対する学業の補習、日曜学校、裁縫、キャンプ、運動会等の活動を行った。この活動は、1937（昭和12）年に終了するまでの9年間継続された。

1927年当時、都市にも農村にも貧困を中心とした社会問題が深刻であった。そのため社会事業科学生の実践の場として、困窮している地域に関東学院セツルメントが開設されたのである。貧しさのために悲観的になっている人が、キリスト教的愛を知り、労働で生活を改善できるようにセツルメント活動を行った。渡部一高教授、J・H・コベル宣教師、澤野良一教授が創設者・指導者であった。

大戦直後の日本人の貧困は、セツルメントを必要としていた。そのような困窮は今はない。しかし、マザー・テレサが指摘した如く、精神的貧困さは増している。隣人の不幸に無関心でいられる現代日本人の心の貧しさがある。故に当時の関東学院セツルメントの遺産を継承し、今日のグローバル社会に対応する奉仕教育の場と機会を学生・生徒・児童・園児のために国内か国外に設ける必要があると考える。なぜならば、関東学院各校は、キリスト教の建学の精神を端的に表した校訓「人になれ 奉仕せよ」を掲げているのだから。

参考文献：2010年発行『関東学院学院史資料室ニューズ・レター』（No.13）

関東学院大学　キリスト教と文化研究所
〒236-8501
横浜市金沢区六浦東１－５０－１
電話：０４５－７８６－７８７３(研究所直通 月～金曜９：30～17：30)
FAX：０４５－７８６－７８０６(研究所直通24時間受け付)

発行者：帆苅　猛
Director: Takeshi Hokari